



第11回国際肝癌学会(ILCA 2017)

小川 力

高松赤十字病院消化器内科副部長

第11回のILCA (International Liver Cancer Association) は9月15日から17日まで、韓国のソウルで開催され、会場のホテルはGrand Hyatt Seoulであった。

学会初日の朝に北朝鮮からミサイルが発射されたが、ソウル市内にアラート、緊張感は全くなく、日本の家族、同僚からの連絡で初めてミサイルの発射に気づいたのが現状であった。また帰りは台風18号が日本に上陸したため、帰りの飛行機が欠航となるトラブルにあったが、学会は非常に有意義な内容であった。

今回のILCA2017の参加は世界36ヵ国500名を超えた。



写真1 小笠原定久先生(左)と筆者(右)

演題数は約200演題で、学会に参加した上位5ヵ国は韓国、米国、中国、台湾、日本で、アジアが約60%を占めたが、例年に比べ日本人の参加が少ない印象であった。

ILCA2017での日本から主な発表は、学会前日の14日にPre-Conference workshopが開催され、Intermediate stage HCC: Therapeutic Debatesのセッションで、千葉大学消化器内科の小笠原定久先生が、HCC患者における、ソラフェニブを含めたsystemic therapyの望ましい開始時期について講演された。小笠原先生は15日のSatellite Symposiumでも、ソラフェニブとレゴラフェニブのAdverse events(AEs)の報告およびそのmanagementなどについても報告された。16日には、近畿大学消化器内科の工藤正俊教授がIndustry Partner SymposiumでHCCに対するレンバチニブの治験のdataなどを提示し、Luncheon Workshopsでは東京慈恵会医科大学肝胆膵外科の矢永勝彦教授、国立がん研究センター研究所がんゲノミクス研究分野および東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センターの柴田龍弘教授が別々の会場でchair, speakerをされた。また最終日の17日は、国立国際医療研究センター病院肝胆膵外科の國土典宏教授がState-of-the-Art Lectureを行った。上記のoral presentationに加え、top scored Posters30に、山口大学臨床検査・腫瘍学講座の山崎隆弘教授、東京慈恵会医科大学肝胆膵外科の恩田真二先生、山口大学消化器内科の佐伯一成先生が選ばれた。

本学会でのtopicsとしては、レゴラフェニブのRESORCE試験の1年後のupdate解析がPhilippe Merle先生より報告された。Update解析ではMSTがplacebo群7.9ヵ月に対してレゴラフェニブ群10.7ヵ月と0.1ヵ月ずつ延長したが、updateでもHR 0.61, $p < 0.00001$ とplacebo群に比